九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

発明の周辺 ： その3「楽観主義」

松原, 幸夫
元九州大学教授

https://hdl.handle.net/2324/4785610

出版情報：2022-06-05
バージョン：
権利関係：

発明の周辺　その３　「楽観主義」

松　原　幸　夫

新潟市の西の方に内野という小さな港町がある。この町は「北国の春」「星影のワルツ」「高校三年生」など昭和の名曲を数多く生み出した作曲家遠藤実の故郷である。また幻の名酒「鶴の友」「上々の諸白」の蔵元もこの町にある。

10 キロほどさらに西に行けば、カーブドッチというワイナリーがあり、温泉も楽しむことができる。その露天風呂からは角田山が一望できる。角田山は、雪割草、カタクリ、コスモスなど四季折々の花が一年中咲き乱れている。

この小さな町の小学校のグランドで、学生たちと町の人たちと一緒にナスカの地上絵を描いたことがある。

ナスカの地上絵で一番有名なのが「ハチドリ」だ。学生たちと話してるうちにこれが実際どのようなものか、いちど実寸で描いてみたいということになった。

どれほど大きなものか見当もつかず描ける場所があるか不安だったが、小学校の運動場に入るくらいということがわかり、先生にお願いして許可をいただくことができた。

当日は 9 月の中旬だというのに 37 度まで気温は上昇したが、快晴で絶好の空撮日和であった。実際に巻尺と分度器を使って絵を描いてみるとなかなか大変な作業である。地上絵を書くためのラインマーカーの石灰は小学校から寄付していただいた。

あらかじめ作っておいた設計図どおりできるだけ正確に線を引いているのだが、実際にやっていると自分達が何をやっているのか全くわからない。ただ設計図の指示に従って何の意味も感じないまま、黙々と炎天下の中で作業しているだけだった。しかしできあがって

から無人ヘリを飛ばして航空写真をとると、確かに見ごとなナスカのハチドリの地上絵がそこに横たわっていた。

山も高台もないナスカの大地でなぜこのような絵を描いたのか、当然飛行機もないのに誰に見せるためにハチドリを描いたのだろうか。実際に描いてみるとますます謎は深まった。それと同時に私たちは普段目の前のことに脇目もふらず取り組んでいるが、たまには日常から離れて遠くから長い時間軸と空間軸の中でみると新たな発見があることを実感した。

内野地上絵プロジェクト

前置きが長くなってしまったが、昨今のような大きな変革期には、いちど立ち止まって、これまできた道、これから進む未来を俯瞰することが大切ではないだろうか。自分のことを振り返ってみても、災難と思えるようなことが後から思い返してみると、それが恵みだったり、次の飛躍へのスプリングボードだったりすることはよくある。

ふと立ち止まったとき、見慣れた場所でも、全く新しい景色に出会うことはないだろうか。同じように遠くを俯瞰するとき、様々な選択肢があることに気がつく。これまで実現不可能と思えた選択肢も可能になってくる。選択の幅が広がると、これまでやむを得ず短期目標を優先する選択しかできなかったものが、三方よしの全ての人に喜ばれる選択肢も可能になってくる。遠くを俯瞰すると、おのずと心が広々と広がり楽観的になる。心が楽観的になるとよいアイデアも湧いてきて夢が広がっていく。楽観的になることで勇気も出てくる。

このような事業は社内もお客様も社会もみんなが応援してくれるので、自ずと事業は発展していく。二宮尊徳が、「遠くを図るものは富み、…」といったのもこのようなことではなかっただろうか。

囲碁の名人は碁盤の一隅で、形成が危うくなり動きが取れなくなると、そこをいちど離れ、他の一隅で碁を打つという話を聞いたことがある。これを繰り返すうちに、形成が問題の一隅と連なり対局が好転してくるのだ。大きな壁に突き当たっても、そこに固執することなく全体を俯瞰することで、展望が開けてくることは多々ある。

仕事のことで行きづまったときに、身の回りの小さな用事や家事をコツコツ片づけていると、知らない間にどうにも手がつけられなかった難事が向こうのほうから勝手に片づいていくというのは、日常よく経験することではないだろうか。

このように書いていくと、あまりにも日本的で調子よすぎると思われる方もいるかもしれないが、楽観主義は別の一面も持っている。

英国の元首相サー・ウィンストン・チャーチルは、「私は楽観主義者だ。それ以外のものは、あまり役に立たないようだ」といっている。当時英国は第二次世界大戦のさなかで、ロンドンは空爆にさらされ窮地に追い込まれていた。その最大の危機を乗り越えたときの首相がチャーチルである。英国にとって楽観主義は、国家存亡の危機を乗り越えるための究極の戦略だったのではないか。楽観主義は苦難のときにこそ、その真価を発揮するのだ。

「困ったときの神頼み」という言葉があるが、「困ったときは、楽観主義」ということなのであろう。そういえばヘレン・ケラーも「未来を開く鍵は楽観主義だ」といっていた。自分に与えられた試練に向き合い身を削るような思いをした人ほど、楽観主義の大切さを身にしみて感じているのかもしれない。